

# 日本靈異記雜考 — 素材・成立事情 —

虎尾 俊 哉

## 一 素材（その一）

「一」日本靈異記の著者景戒は

觀さか創かに聞くことを注し、（上巻序文）

淨き紙を地く黥し、口伝を謄り注す、（中巻序文）

我、聞く所に從ひて口伝を選び、（下巻跋文）

などと記しつけており、靈異記所收の説話を耳から聞いた話として採録した形をとっているが、実際には、何か先行の成書から採つて文をなしたものの存することは確実であり、これは既に先考の指摘されている通りである。佐藤謙三氏の『校本日本靈異記』によれば、中國の仏教説話集で、この靈異記所收の説話と内容的に兩連のあるものとして、『冥報記』に九話、『金剛波若經集驗記』に一話、『法苑珠林』に三話が見出されるという。また武田祐吉博士の『日本古典全書本』『日本靈異記』の解題にも、わが國の先行文獻から素材を得たと考えられるものとして、「本記を案ふるに曰はく」という文言のある上巻才五話、「有記に曰はく」という文言のある上巻才

二十五話、藤原宏民が地獄を見た話である下巻才九話、その他、聖徳太子、上巻才四話）、役の優婆塞（上巻才二十八話）、行基（中巻才七話外）に關する記事などが指摘されている。この中で、方法論的に興味を引かれるのは、下巻才九話の宏民が地獄を見た話に先行文獻を規定される方法で、それはこの説話の文章にも内容にも、他の類叙の説話とことなる歴然たる特色の存すること（標識とする方法である。この方法はかなり困難な方法であり、適切な指摘の可能な例はそれほど残されていないであろうが、しかし、外に方法がない以上、可能な限りその試みを続けてゆく外はありまい。

（二）その試みの才一として、上巻才二話と同才三話（以下、上二・上三などと略記する）に見られる表現上の特徴の同一性、さらにその同一の特徴の孤立性という二点を指摘したい。すなわち、上二の書き出しは、

昔欽明天皇 是磯城嶋宜刺官食臣天國押南天皇弟也御

世……

であり、同じく上3の書き出しは

昔敏達天皇是磐余詔田宮食田淳名倉太王兼命也御也

となつていて、両者は固有名詞の部分と別にするだけで

昔<sup>（漢風諡号）</sup>天皇是——宮食田——命也御也

という形式は完全に同一である。しかも「某天皇の世へ代へ」を示す形式として、これと全く一致するような例は外に一つもない。しかもそれが単なる偶然でないことは、前掲の形式に幾つかの特徴を見出し得ることによつて立証される。

またオーに漢風諡号の使用である。本書においては、若干の例外を除いて一般に漢風諡号は使用しないのが通例であり、漢風諡号の用いられているのは

上序文……欽明

上1……雄略

上2……欽明

上3……敏達

上5……敏達、用明、孝徳

上32・中2以下多数……聖武

の六天皇の例だけである。そして、この中で「聖武天皇」の用いられている例をすべて調べてみると、上3に

諸衆宮御宇勝室庇真聖武太上天皇

とあつて、その次の上32に「聖武天皇」が出てくるので

あり、また、中1に

諸衆宮御宇大八嶋國勝室庇真聖武太上天皇

とあつて、その次の2以下、中巻には「聖武天皇」が頻出するのである。「聖武太上天皇」という用例も二例（中5・中36）存する。従つて、これは各巻ごとに初出の部分に宛名を出した上で、その次から省略的な記載法をとつたためと理解してよい。「聖武天皇」とならんで「聖武太上天皇」が出て来ることもこれを示していると思つてよい。

とすると、「聖武天皇」という漢風諡号使用の例は、実はすべて「勝室庇真聖武太上天皇」という表現に還元できるのであつて、これならば、漢風諡号としてではなく、「勝室感神聖武皇帝」（純日本紀天平宝字二年条）という尊号を使用していると見て差支えないから、当然この「聖武天皇」の例は削除すべきことになる。従つて、漢風諡号の用いられているのは上序文、1、2、3、5の5で、天皇で言へば雄略、欽明、敏達、用明、孝徳の五天皇となる。つまり靈輿記に即して言へば、上巻のはじめの方に限られ、天皇の年代で言へば古い時代に限られているのであつて、例外的な漢風諡号の使用には単なる偶然とは受けとれない一つの統一的な背景の存することと知られるのである。しかも、この中で上5について、敏達、用明、孝徳の諡号はいずれも本記なるものから引用文の中にあり、本記での使用法を模倣がそのまま

襲用したと考へべき可能性が強い。これは当面の問題たる上2、上3について考へる際にも、一つの手掛りを与へるものである。

次に天皇名について細字の註を加へていることも、上1の

泊瀬朝倉宮廿三年治天下雄略天皇謂大泊瀬稚武天皇という例を除けば、外には見られぬところである。つまり、上1、2、3に共通な特徴である。またその細註の中で、「——命」という表現を用いてゐるのは、この上2、上3の二ヶ処だけであつて、この点には完全に他に類例がない。

才三に、「食国」という用語も外にあまり例がなく、中27と下38に各々一つずつあるだけであるが、その中27は、元興寺の直場法師の孫にあたる力女が強力を示す語であつて、直場法師が雷神の靈力によつて出生した話である上3の、謂わは統稿の如きものである。同一の素材から出ている可能性も考へられなくはない。また、下38は通常の説話と異なつて、災と善とが現われるには、その前兆が必ずあるという書き出しに始まり、その後はその実例を列挙するという形をとつてゐる（通例は一説話ごとに主人公は一人で、まずその主人公の紹介から筆を起してゐるのであつて、この点で他の説話と同列に論ずべからざるものを持つてゐる。従つて、この点からも上2、上3に見える「食国」の用法が特色のあるもの

であることが肯けるであらう。

更にもう一つのつけ加へるならば、上2の末尾は

三野国狐直等根本是也。

という形で終り、上3の末尾近く、話の本筋の終つた部分

後世人伝謂元興寺直場法師強力多有是也。

という形をとつてゐる。こういう形式は上1の

所謂古時名爲雷國語本是也。

という例を除いては外に見当らない。つまり上1、2、3に共通な特徴である。

以上のように見て来ると、上2と上3の二つの説話の文章表現の特徴の完全たる同一性、その同一の特徴の孤立性ということは、決して偶然の現象ではなく、この二つの説話が同一の先行文献から出ていることに基づく判断せざるを得ない。そしてその点は当然内容上からも支持されねばならない筈であるが、上2は三野国の狐直に因する氏名起源説話であり、上3は世に名高い元興寺の直場法師の怪力の起源説話であつて、ともに佛教的庇報譚でないという点で共通であり、従つてまた他の説話とは著しく異つてゐる。

以上によつて、上2、上3が同一の先行文献に依拠し、これをほぼそのまま採用したものであることは明らかである。景戒自身の仕事は、上3の末尾に  
当に知るべし、……これ日本の國の奇しき事なり、

と記しただけの事なのである。ただ、その先行文献の成立時点がいつかということになると、漢風諡号使用という点から見て、天平宝字年間を遡ることは考えられない。そしてそれと続日本紀あたりにおける漢風諡号使用の例から見ると、延暦朝以降のことではなかったかと想像されるのである。

(3) 以上、前項で述べたところから、すでにお気づきのことと思うが、上1もまた比較的上2、上3と類似した特徴を持っている。すなわち、漢風諡号を使用していること、その下に細註の形で和風諡号を入れていること、話の末尾を「——是世」という語でしめくくっていること、などの点である。そして内容上においても、この上1は酒岡に關する地名の起源説話であつて、佛教的庇載諡の色彩が全くないという点で、やはり上2、上3と共通の特徴を有する。

このように見て来ると、上1もまた先行の文献から採録されたらしいと想像されてくるが、ただ上2、上3と同一の文献ではないようである。これをとくカギとして、再び天皇名の表記法に注目しよう。

泊瀬朝會宮廿三年治天下雄略天皇 謂大泊瀬稚武天皇  
この「——宮——年治天下——天皇」の用何は、やはり體異記では珍らしい表記法であつて、一般に上巻では「——宮御宇天皇」・「——宮御宇——天皇」という形式

が大宗を占め(この外に省略的記載のあることについては前項参照)、中、下巻では「——宮御宇大八嶋国——天皇」という風に「大八嶋(州)国」の四字が挿入追加される例が増えている。いずれにしても、全体としては「御宇」という表現がその大宗を占めている訳である。

そして「——年治天下」という表現は最後の下38・下39にしか見えない(「治天下」だけならば中39に一例ある)。しかも、この下38、下39には「御宇」という表現が全く見えていない。従つて、この下38、下39はその制作の時期を異にするのではないかと思われるのであるが(下38が前述の通り特異な構成をとること、およびここに景戒の自注のあることを想起せよ)、そういう下38、下39と同一の特徴を有する上1は、下38、下39とともに後から附加された趣きが強い。しかも上2、上3と共通する特徴もあれば持つことから判断して、上2、上3とは別の先行文献から採録したと判定すべき可能性が大存である。

(4) 以上、「2」、「3」の二項にわたつて述べたところには、ほぼ大きな誤りなしとするならば、上1、上2、上3はすべて先行の文献から素材を採つたものということになる。そして、これは続く上4は聖德太子に關する説話で、これは太子に關する伝記が早くから著述されていたらしいことから判断して、武田博士の言われる如

く成書からの採録と考えてよいであろう。更にその次の上には、これまた既に述べたように「本記」なるものの引用である。従つて、上から上りまでは、いずれも先行文献を素材としたものと判定してよい。これは時代的に最も古い説話ばかりで、そういう点からも支持されるであろう。

## 二 素材（その二）

〔5〕ところで、靈異記の素材の中には、景戒の言う通りに、實際に彼自身が直接にある伝承者からその耳で聞いた話も、勿論数多くある筈である。この点については、景戒が紀伊国名草郡の出身か、或いは或る期間この地に止住したと考えられるので、紀伊国に關係のある説話の大分部は、当然そういう風に理解してよいであろう。

しかし、靈異記に収録されている説話は、全国的に相當な範圍にわたつており、かつ、景戒自身が旅行して各地で採録したらしい形迹は見出せない。従つて、そういう遠方の地を舞台とする説話は、植松茂氏の言われるように（『国語と国文学』昭和三十一年七月号所収「日本靈異記における伝承者の向題」）、おそらく僧侶とかその他の寺院関係者の手によつて語りつがれ、景戒の耳に入つたと想像される。そして、それを比較的容易に想像せしめ得る例もある。下16などはその好例である。

この下16の話の舞台は越前國加賀郡、主人公はこの郡の女、横江臣成刀自女、そして時は宝龜元年のことである。この成刀自女は美女であつたことが却つて災と存り、淫佚な生活を送り、わが子に乳を与えず、その罪によつて死後苦痛を要けているといふのであるが、その様子を夢告で知つた人は、當時、故郷の紀伊國名草郡能庇里をはなれて修行の旅をかさね、丁度加賀郡畝田村に「年を還て止まり住し」していた寂林法師であつた。従つて、この話はおそらく故郷の紀伊國名草郡に帰つた寂林法師から、景戒が直接聞いたか、或いはその間に伝承者が介在したにしても、その人もまた名草郡の人であらうと想像されるのである。

〔6〕こういう風に、遠方の國の話でありながら、景戒の身近に近い人の中に伝承者を推定できるような場合は、実はほとんどないと言つてよい。しかし、すこし綿密に調べ、まだ多少の推測を許されるならば、外にもその例をさぐり得ないでもない。今その一例を示してみよう。

靈異記の説話の中、比較的遠い國の話として武藏國に關するものが三つある。簡単に紹介しよう。

中3——武藏國多摩郡鴨里の人、吉志大麻呂は聖武天皇の時代、大伴某という役人に指名されて防人となつたが、故郷にのこして来た妻に会いにばかりに、一緒に九州に行つていた母を謀殺し、母の喪に眼す

るということ、防犯の義務を免除して貰つて帰郷しようとしたら、却つて自らの身を亡ぼしてつた。

中9——武藏国多摩郡の大領大伴赤麻呂は天平勝宝元年十二月十九日に死んだが、寺のものを借りて匿着してゐたので、その罪によつて同二年五月七日に子牛に生れかわつて使役される罪命となつた。下7——武藏国多摩郡小河郷の人、大直山縫は毛人（えみし）

Ⅱ蝦夷へ征討の際従軍したが、観音の木像を驚く敬してゐたために無事帰還し、その後一層信仰を深めた。ところが天平宝字八年仲麻呂の乱にまきこまれ、死刑にされるところを観音の力で助かり、その後、結局多摩郡の少領に任命された。

以上を通覧して気づくことは、この三話がすべて多摩郡に關係するものであるという点である。武藏国に關する話は三つしかないが、そのすべてが多摩郡に關するものであるということは、偶然として片づけることに抵抗を感じしめる。そして、中9の役人は大伴某、中9の大領は大伴赤麻呂というように共區の氏の名を伝え、また中9の主人公は大領、下7の主人公も少領というように、ここにも郡領に關する話という点で共區性がある。

従つて、この三話は多摩郡に關係の深い同一の伝承者によつて伝えられたのではないかという想像が可能である。ところで一方、下30にはこういう話がある。すなわち「（7）聖武天皇の御代、紀伊国名草郡の人で彫刻のうまい人、

あつたが、延暦三年二月十一日、名草郡能成村の跡勸寺（Ⅱ能成寺）で死んだ。しかし制作中の十一面観音像を未完成のまま死んだことがどうしても疑になつて、二日後に生き返り、弟子の明規と「知識武藏村主多利丸」にその完成を依頼し、更に二日後の十五日に再び死んだ。「仏師多利麻呂」はその遺言通り十一面観音像を完成して供養した、というのである。

この話の舞台は、前に紹介した下16に出て来る紀伊国名草郡能成村であつて、景戒の身辺に近い処である。そして、この話の中に「知識」或いは「仏師」として出て来る武藏村主多利麻呂なるものの氏姓は、如何にも鬼世し難い。これが彼の本名か或いは字か、それは詳らかでないが、いずれにせよ武藏國に縁のある者で、当時紀伊国名草郡に生活の根拠を移してゐたものではないかと思ふ。もし、この推測が許されるならば、前掲の武藏国多摩郡を舞台とする三つの説話は、彼によつてもたらされたものではなかつたか、という想像が可能となる。勿論これはあくまでも想像の世界にとどまるものであるが、しかし、相當に信頼度の高い想像であると言えよう。

### 三 成立事情

〔7〕聖武天皇の成立事情については、弘仁年間成立ということでは諸説一致しているが、これは最終的な成立

年代で、これ以前に延暦六年の原撰という段階のあることを認める説と認めない説とが対立している。そして、この延暦六年原撰説の根拠は、前田本靈異記下巻の序文に

自仏涅槃以來、迄于延暦六年歲次丁卯、而僅千七百廿二年、

とある。この部分が延暦六年の時点で書かれたらしい支脈だからである。ところがこの部分を含む一七六字は他の本にはなく、前田家本にのみ見えるところであり、そのためこれを景戒の真作と認める説と後人の偽作と判定する説とを生じ、その相違に従って前掲の延暦六年原撰を認めると認めないとの相違を生じているのである。従って、まずこの前田家本にのみ見える一七六字が真作か偽作かということから問題としなければならぬ。

最初に偽作説を提出されたのは武田祐吉博士で（『上代国文学の研究』）、その根拠は訓釈の語の中、そこに期待される四語が見当たらないという点にある。その後、この説を支持して一層強く偽作説を主張されたのは板橋倫行氏で（『国語と国文学』七の二所収）『日本霊異記の撰述年時について』、その根拠は、延暦六年頃、景戒はこのような序文を執筆し得る地位にはなかったこと、正徳末三時の年数計算に誤りがあるらしいこと、末劫と末法との概念に混同のあること、などの諸点である。

これらの偽作説に対し、詳細に反論を展開されたのは、

池田龜鑑博士で（『中古国文学叢考』三分冊所収）『日本霊異記の逸文は果して偽作なるか』、博士は偽作説の根拠はいずれもなお薄弱であり、キ×手と存るものは提示されていないとされる。

要するに、この問題はまだ十分に決着をみた訳でなく、例えは武田祐吉博士はその後偽作説を和けて態度を保留されたらしい様子であり（『日本古典全書本問題』）、八木梨氏は池田説によって偽作説はすっかり片づいて了つたように言われるが（『語文』二五所収）『日本現報靈異記と異報記』）、しかし一方、板橋倫行氏は依然として偽作説を撤回しないままに（『角川文庫』日本霊異記附註）他界された。

従って、この問題はなお容易に解決し難いが、しかし私はこの前田家本下巻の序文の問題をはなれても、現存の靈異記が原撰と追補という二段階の作業を経て成立したものと考えている。そう考える理由の一端は、前述の素材に關する私見の中からも、或る程度読み取って頂けると思ふが、更に一、二の点を掲げてみよう。

（8）まずオーに問題としたいのは、下30に

長岡京御宇大八島國山部天皇代延暦元年癸亥春二月十一日

という表現の見えることである。この下30というのは、紀伊国名草郡の龍光寺を舞台とする話で、おそらく景戒

自身の側面した話であろうと思われる。従つて、先行文献による記し様ではなく、景戒自身の表現であると見てよいと思う。ところが、ここに「長岡宮」とあることが注意される。すなわち、桓武天皇が長岡宮を皇居としたのは、延暦三年から同十三年までの十年間であつて、前掲のような表現はこの期間内において最もふさわしいものである。勿論、延暦十三年以後においても、何えは弘仁年間においてもこういう表現が全くあり得ない訳ではないが、その場合には下39に見える。

#### 平安宮治天下山部天皇延暦五年歲次丙寅年

の如き表現をとる方が普通であらう。この下39の場合も延暦五年という長岡宮時代のことであるにかかわらず、そのことと関係なく、山部天皇Ⅱ桓武天皇に因する修飾語として「平安宮」が冠せられているのであつて、こういう類例を参考すれば、下30のような表現がとられるのは、長岡京遷都以後でしかも平安京遷都以前においてのみ可能であると思ふ。ことにこの下30の表現が、延暦元年という長岡京遷都以前の時点についてのものであることも併せて考へべきである。とすれば、この下30の記し様は長岡宮が皇居であつた延暦三年乃至十三年における記し様ということになり、従つて嵯峨天皇を「今」と記し、「弘仁」の年号に言及する下31とは執筆の時点を異にすると言ふべきことになる。

次に問題としたのは、下36に

#### 諸樂宮御守白壁天皇

という表現の見えることである。「2」で述べたように、この靈異記では一度天皇の完名を出すと、すくなくとも同一の巻の中では、あとは省略形を用いるのが普通で、この白壁天皇Ⅱ光仁天皇の場合も、下16で完名を出し、下17、下30では省略形を用いているのである（註2参照）。従つて、同じ下巻のなかで、この下36に、初出でもないのに前掲のような完名が記されていることは異例のことと言わなければならない。つまり、この下36は下16、下30が一人成立した後につけ加えられたという趣きが強のである。そして同様のケースは下38、下39においても認められる。従つて、もし推測を許れるならば、下36あたりから後が追補された部分ではあるまいか。

「9」以上のように見て来ると、下巻の巻末教話（追補的な色彩が強いということになるが、こういうことは、下巻のみならず、上巻、中巻それぞれにおいてもあり得ることであるから、そういう観点から、なお精査してみると、上巻最末尾の33、34、35の三話は、いずれも「盗難」、「盗人」に關係のある話という点で共通なものを持ち、しかもそれぞれの年代を記しつていない。もともと靈異記では神経典なまでに年代を示すことに注意を怠つていないのであつて、こういう年代を記しつていない説話は例外的と言つてよい。しかも「盗」に因する

語として共通性を持ち、連続して上巻の最末尾に配置されているということにすれば、この三語もまた追補の疑いの濃いものと言わなければならぬ。

また、中巻の末尾近く39には

奈良宮治天下大救天皇

という表現が見える。この「治天下」は(3)でも述べたように、上1と下38、39にしか見えないものである。従つて、中39以下も下38、39とともに追補されたと見るべき可能性を秘めている。さらに上1と上13にも同様のものがあることは、(2)と(4)で述べた通りである。

(10)およそ以上の諸点から、この靈異記は二段階の成立期を持ち、原撰が延暦三年(十三年)の向にあることが言えるのではないかと思う。仮に、それを延暦六年と限定し得るか否かは、前述のようにキメテを欠くのである。

### 註

(1)文章上の特色としては、閻羅王がものを言うことを記すのに「告之」・「向告」・「爰告」などに「告」の字を用いていること(他の地獄説話では一般に「曰」字を用いている)。また内容上の特色としては、この説話には書中唯一の地藏菩薩の例が存す

ること(「我を知らむと欲はば、我は閻羅王、汝が國に地藏菩薩と称ふはこれなり」)。

(2)同様の例は次のような場合にも見られる。すなわち、下1に「諸衆宮御守太八州國之帝姫安倍天皇」と見え、下5から下15にかけて「帝姫安倍天皇」という省略形が頻出し、また、下16に「奈良宮御守太八島國白壁天皇」と見え、下17から下30にかけて「白壁天皇」が頻出する。

(3)仮に、この「勝宝陀真聖武太上天皇」というのは、持合校育が『日本靈異記攷証』で指摘しているように、光明皇后の尊号「天平陀真仁聖皇太后」と混合して、「感神」を「施道」と誤っている。

(4)坂本太郎博士「列聖漢風諡号の接連について」(『日本古代史の基礎的研究』下制戸篇、所収)。

(5)坂本博士前掲論文にその例が掲げられている。これについて博士は、天施ころからの学者の上表之ありから、倭聖に旧の宮号を以てする尊称を加えて使用している(例えは他田朝御尊敏達天皇)ことに特に注意を拂つておられる。

(6)靈異記においては、紀伊國の名の現われる話が十八あり、その中の七話に名草郡の名があらわれている。こういう点から、警戒は紀伊國名草郡の出身か、或いは或る期この地に滞在した人物と考えられていることは周知の通りである。

(7) 以上、靈異記の素材として考えられる先行文献・

口伝のおのおのについて、素雑な考察を加えて来たが、  
靈異記の素材としては、もう一つ、寺院などに事蹟  
された絵馬の如きものが考えられる。これについて

は「鎮録して流布しき―日本靈異記の素材―」  
（『日本正史』二一三編掲載予定）と題する短文を参  
照されたい。